

# 日本認知言語学会論文集

## 第7巻

Proceedings of the Seventh Annual Meeting of  
the Japanese Cognitive Linguistics Association

Vol. 7

JCLA  
2007

# 目次

## 研究発表

応用認知言語学的な日本語教育の試み	森山新	1
日本人英語学習者による英語の関係節習得： —主文動詞句の処理能率の観点から—	森本智・堀江薫	12
参照点能力と第2言語習得 —長期定住外国人と日本語母語話者との会話データを通して—	佐野香織	23
文法化の構成的モデル化 —進化言語学からの考察—	橋本敬・中塚雅也	33
オートポイエーシスを取り込んだ理論の構築へむけて	岡本順治	44
認知モード転換と属格／主格交替 —いわゆる他動性制約の反例および認知類型論的示唆—	小熊猛	55
二つの話者関与度スケールの相関 —「から」と「ので」の違いの分析—	宇野良子・池上高志	66
"Over-V": 使用場面に動機付けられた統語パターン	加藤鉦三・花崎美紀・近藤弘子	76
起点と着点をめぐって	梅本孝	87
道具と場所の中間領域をめぐって —フランス語を中心に—	山田 博志	98
英語前置詞 <i>for</i> , <i>by</i> とスペイン語前置詞 <i>por</i> の概念メカニズムへの 認知的アプローチ —異言語研究と教育—	森山智浩・福森雅史	109
人間関係のメタファーにおけるスキーマ類型	水野真紀子・内田諭・アニタ ナジ・大堀壽夫	120
意味役割理論から見た名詞の種別と隠喩的使用との関係	中本敬子・金丸敏幸・黒田航	131
擬情オノマトペの表す意味とその音的特徴について	ヤン ジョンヨン	142
擬態語における長母音と反復形の音象徴と類像性： 「かっ」「かあっ」「かっか」	竹本江梨	153
日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について	大石亨	160
Very と極限形容詞についての—考察	家口美智子	171
膠着語における節の文法化に関する—考察 —日本語・韓国語の理由を表す接続詞「だから」 「그러니까 geureonikka」の意味形成過程について—	大塚真理子	182
北信方言「～しない?」についての認知言語学的考察：文法化の観点から	山崎章裕	193
場所に存在することの表現から進行相表現へ—英語進行形の文法化	今井澄子	202
認識的用法の <i>must</i> を含む疑問文の文脈について	眞田敬介	213
"half"は「半分」か?—量から質への認知的動機付けについて	有光奈美	224
I don't know that p. と *?I don't realize that p. について —「認定的知識」の導入—	森貞	235
「コントロール」特性を決める意味的要因について	高木宏幸	246

英語の名詞補文選択について

—いわゆる同格表現におけるto不定詞とof動名詞を中心に	本間勇一	257
叙述の二次述語に対する意味的・語用論的分析	藤川勝也	267
主題非明示型結果構文の構文的環境とそのカテゴリー形成	對馬康博	277
ジェスチャー対話における左右逆転現象克服の方略について	小田弘美	288
身体部位を表すタイ語の文法化: 「nāa (顔)」を中心に	ラダポーン サイソンプーン	299
「頭」「胸」「腹」—精神活動の在り処としての身体部位詞—	有蘭智美	310
場所的存在論によるハとガの統一的説明	岡智之	321
[ _ガ _ニ V ] 構文における二格名詞句について: 構文文法的な考察	伊藤健人	332
「ウナギ文」の認知言語学的分析 —メトニミーの下位区分を通して—	山本幸一	343
Blended Referents in Conceptual Disintegration	安原和也	354
オノマトペの意味拡張の事例に基づく共感的比喩表現の		
—方向性における反例と考察	大澤(伊藤) 理英	365
The Perception-cognition interface:		
An Experimental Study of Expressions of Auditory Phenomena	高田麻里	375
Subjective/objective construalと主体化との関わり	平川公子	383
複合動詞と主体化に関する考察		
—複合動詞「～づける」の分析を通して—	金丸敏幸・村田真樹	394
英語における形容詞と副詞の意味的機能について	金澤俊吾	405
多次元プレーンモデルによる構文の拡張 —日英語の属性叙述受動文—	町田章	416
マッチングと矛盾文の伝達情報	酒井智宏	427
Discourse Marker Function of Some Phatic Interjections in English	パトリシェヴァ ニーナ	438
なぜ英語進行形に起動相的解釈は不可能か(認知文法の視点からの分析)	中西充一	449
英語の現在完了形の時制の意味機能	樋口万里子	457
日本語のモダリティの意味の原型性: 第2言語習得データに基づいて	玉地瑞穂・堀江薫	468
事象の確定/非確定とモダリティ		
—英語法助動詞 MUST/WILL の対比を中心に—	片岡宏仁	479
行為の規模と構成性の意味論: 動詞と構文を中心に	野澤元	489
分析可能性の低い語彙的複合動詞に関する一考察		
—「落ち着く」の意味分析—	野田大志	500
構文文法からのアプローチによる同語反復表現の考察		
—「XらしいX」を中心に—	野呂健一	511
On the Co-occurrence of Verbs of Charging and Ditransitive Construction	年岡智見	522

## シンポジウム

認知言語学と言語教育	司会：吉村公宏	533
中学校での英語の名詞の〈数〉と冠詞の指導 — 認知文法を活用した試み —	岸本映子	536
認知的スタンスと英語教育	田中茂範	552
認知理論に基づいた総合的日本語教授法	李徳奉	565
認知の発達と言語教育	岩田純一	573

## ワークショップ

認知言語学から見た日本語教育 — 〈主観的把握〉の理解・運用のために —	代表：守屋三千代	582
参照点としての「私」と自己中心的な「私」	近藤安月子・姫野伴子	583
文章の「語り」と「読み」 — 〈共同注意〉と〈間主観性〉の観点から —	守屋三千代	591
日本語テキスト解析ツールTextImiの紹介	代表：深谷昌弘	595
日本語テキスト解析ツールTextImiの概要	中野智仁	596
文構造の標準化によるKwicの拡張	秋山優	600
基礎意味チャンクのタグ付け支援	林千登	604
TextImiを用いた言語研究の事例	佐治伸郎	608
受け語から表現の共通性を見出す方法と考察	舘野昌一	612
慣習化された表現からの日常概念分析～事例研究：日本人の自然観～	榎田晶子	616
音を伴う移動構文をめぐって：対照言語学的観点から	代表：深田智	619
移動自動詞構文に関する一考察：音放出動詞を中心に	田村幸誠	620
タイ語の音と移動表現に関する基礎的観察	ガルナー コンラチャック	624
インドネシア語の記述的分析	津田喜美代	627
スペイン語の音を伴う移動構文	和佐敦子	629
日本語における〈音〉を伴う〈移動〉の認知	深田智	633

# マッチングと矛盾文の伝達情報

酒井 智宏

(日本学術振興会特別研究員)

## 1. はじめに

矛盾文「XはXでない」はしばしば条件節相当の表現と共起する(大久保 2000)<sup>1</sup>。

(1) 猫はねずみを取らなければ猫ではない。

一般に、条件節を伴う矛盾文「PならばXはXでない」は次の伝達情報を持つ。

- (2) a. 伝達情報 1: 属性Pを持つ特定のXをXとして扱うのをやめるべきだ。  
(特定のXの処遇)
- b. 伝達情報 2: 属性Pを持つ特定のXが属性¬Pを持つようになることが望ましい<sup>2</sup>。(特定のXのあるべき姿)
- c. 伝達情報 3: 一般にXは属性¬Pを持つものだ。(カテゴリーXの定義)

これを例文(1)に当てはめると、(1)は次のような伝達情報を持つ。ここでは、「X = 猫」、「P = ねずみを取らない」、「¬P = ねずみを取る」である。

- (3) a. 伝達情報 1: うちで飼っているタマはねずみを取らないから捨ててしまおう。(特定の猫の処遇)
- b. 伝達情報 2: タマはねずみを取るべきだ。(特定の猫のあるべき姿)
- c. 伝達情報 3: 一般に猫はねずみを取るものだ。(カテゴリー「猫」の定義)

これまでの研究では、伝達情報 1 と伝達情報 3 が断片的に論じられてきたのみである。大久保 (2000)は伝達情報 1 が矛盾文「PならばXはXでない」を定義すると考え、矛盾文が伝達情報 1 を生み出す過程を考察することを原理上放棄している。大久保にとっては、伝達情報 1 はいわば矛盾文が固有に持つ辞書的意味に過ぎない。坂原 (2002)は「PならばXはXでない」が、カテゴリーXの非プロトタイプのメンバーをXから締め出す機能を持つとし、属性¬PがXのプロトタイプのメンバーを定義するとしているが、「PならばXはXでない」がなぜそうした機能を持つのかを論じていない。

この論文では、メンタル・スペース理論(Fauconnier 1985, 1997, Fauconnier and Turner 2002)の枠組みで、矛盾文「PならばXはXでない」が伝達情報(2a-c)を持つという事実を理論的説明を与える。

## 2. 議論の構成

以下の議論は次のように構成されている。まず、メンタル・スペース理論におけるマッチング概念により、矛盾文とは独立に条件文「PならばQ」の解釈スキーマを定式化する。次に、条件文「PならばQ」の解釈スキーマから条件文が持つ三種類の伝達情報を導出する。一方で、条件文とは独立に矛盾文「XはXでない」の解釈スキーマを提示し、矛盾文の解釈スキーマと条件文の解釈スキーマを単一化する。これにより、矛盾文は条件文の一種であり、かつ条件文は矛盾文の一種であることが正当化される。最後に、矛盾文の伝達情報(2a-c)が条件文の三種類の伝達情報の一種に過ぎないことを明らかにする。すなわち、矛盾文「PでなければXはXでない」は条件文「PならばQ」の一種であり、「PならばQ」が持つ三種類の伝達情報を矛盾文が継承し、それらの伝達情報が(2a-c)に対応するということである。この考察により、伝達情報(2a-c)を矛盾文に対して恣意的に割り当てる必要はなく、これらが矛盾文と条件文の意味論から必然的に導出されることが明らかとなる。

### 3. 条件文の伝達情報

一般に、条件文「PならばQ」は少なくとも3種類の情報Rを伝達する(喜田2000)。

#### (i) R=Qが正当化する結論

- (4) a. 明日晴れたら太郎が来る。  
b. R = 今日食材の買い物に行こう。

「明日晴れたら太郎が来る」は「今日食材の買い物に行こう」という結論を正当化することができるが、これは後件「(明日)太郎が来る」が単独で正当化する結論に等しい。

#### (ii) Qが望ましいことであれば、R=「Pの成立が望ましい」

Qが望ましくないことであれば、R=「Pの成立は望ましくない」

- (5) a. 努力すれば受かる。  
b. R = 努力しよう。  
(6) a. 飲み過ぎたら明日つらい。  
b. R = 飲み過ぎるのはよそう。

(5)の「受かる」は望ましいことなので、「努力する」も望ましいことであるという結論が導かれる。(6)の「明日つらい」は望ましくないことなので、「飲み過ぎる」も望ましくないことであるという結論が導かれる。

#### (iii) R=「PならばQ」の要約

- (7) a. 牛乳を飲むと気分が悪くなる。  
b. R = 牛乳アレルギーだ。

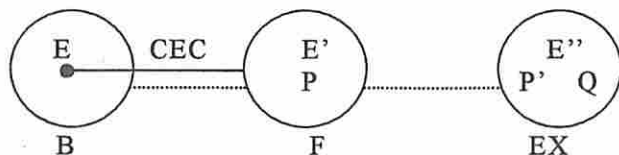
「牛乳を飲むと気分が悪くなる」というのは、一言で言えば、「牛乳アレルギーである」ということである。

喜田はこれらの伝達情報を条件文が固有に持つものであるとしているが、実際にはそのように考える必要はない。第4節と第5節で見るように、これらは条件文「PならばQ」の意味論と発話文脈から導き出すことが可能である。

#### 4. 条件文の解釈スキーマ

坂原 (1985) および Fauconnier (1997) を踏まえると、一般に条件文「PならばQ」は次のスペース構成を作ると考えることができる (酒井 2005b)。

(8)



B: 基底スペース

F: 基礎スペース

EX: 拡張スペース

E: 命題集合

CEC: 因果コネクター (Fauconnier & Turner 2002)

$CEC(E) = F-EX$  (i.e. E は F-EX の原因)

$IC(E) = E'$ ,  $IC(E') = E''$ ,  $IC(P) = P'$  (i.e.  $E = E' = E''$ ,  $P = P'$ )<sup>3</sup>

Figure1: 「PならばQ」

条件文「PならばQ」は、基底スペース B に対して基礎スペース F と拡張スペース EX を開く。F には前件 P に対応する命題が書き込まれ、EX には後件 Q に対応する命題が書き込まれる。ここで、スペース EX はスペース F に従属し、スペース F はスペース B に従属しているため、上位のスペース内の情報は、デフォルト的に下位のスペースによって継承される。F に書き込まれた情報 P は EX によって継承される。図中ではこの情報を P' で表している。また、条件文「PならばQ」において、多くの場合 P は Q の真に論理的な意味での十分条件ではなく、十分条件をなす命題集合のうちで最も言及価値の高い命題であるに過ぎない(坂原 1985)。Q の十分条件をなす命題集合から P を取り除いたものを E とおくと、E は「PならばQ」が成り立つための原因命題と考えることができる<sup>4</sup>。図中では E とスペース連鎖 F-EX を因果コネクター CEC で結合することによりこの事実を表している。すなわち、F-EX というスペース連鎖の論理的健全性を保証するのは命題集合 E である。

(8)のスペース構成は次のマッチング操作を定義する。

(9) マッチング操作: スペース F の構造とマッチする任意のスペースにスペ

ース EX の情報を投射せよ。

一般に、任意のスペース M がスペース F とマッチするのは、F が M を包摂する場合、逆に言うと、M が F の情報をすべて持っている場合である。このとき M にスペース EX の情報が投射される。(9)によると、スペース F の命題はマッチング操作が適用されるための条件、すなわちマッチング条件を定義している。

## 5. マッチングと条件文の伝達情報

本節では、第3節で見た条件文の三種類の伝達情報が前節で提示したスペース構成とマッチング操作により導き出されることを示す。

### 5.1 肯定式による伝達情報

マッチングにより、(10a-c)が与えられたとき、命題(10d)が導出される。

- (10) a. 明日晴れたら太郎が来る。(条件文の発話内容)  
b. 明日太郎が来るならば、太郎に食事を出す。(文脈情報 1)  
c. 明日太郎に食事を出すならば、今日食材の買い物に行く必要がある。  
(文脈情報 2)  
d. 明日は晴れる見込みである。(文脈情報 3)  
e. 私は今日食材の買い物に行く。(結論=伝達情報(i))

これは次の操作による。ここでは三つの基礎スペースと拡張スペースが関与するので、便宜上番号を付け、三つの基礎スペースを F1、F2、F3 と呼び、それぞれに対応する拡張スペースを EX1、EX2、EX3 と呼ぶ。

- (11) a. 発話される条件文: F1: P (明日晴れる)  
EX1: Q (明日太郎が来る)  
b. 文脈情報 1: F2: Q (明日太郎が来る)  
EX2: S (明日太郎に食事を出す)  
c. 文脈情報 2: F3: S (明日太郎に食事を出す)  
EX3: U (1日前に買い物に行く)  
d. 文脈情報 3: T (「明日」に対応するターゲットスペース): P (晴れである)  
e. 結論: (11a)と(11d)から、F1 と T のマッチングにより、T: Q  
T: Q と(11b)から、F2 と T のマッチングにより、T: S  
T: S と(11c)から、F3 と T のマッチングにより、T: U  
ゆえに、今日買い物に行く。

これは条件文が表す命題と文脈情報とを用いた肯定式による推論である<sup>5</sup>。喜田(2000)が論じている条件文の第一の伝達情報は肯定式を用いた推論に過ぎない<sup>6</sup>。

### 5.2 望ましさの概念による伝達情報

一般に命題「Q であることが望ましい(望ましくない)」は、条件文「Q であるなら



ば、それはよい(よくない)ことである」に還元できる(Dinsmore 1991)。このとき、(13)が示すように、マッチング条件(12a-b)の連言は(12c)と等価となる。

- (12) a. 飲み過ぎたら明日つらい。(条件文の発話内容)  
b. 明日つらいのは望ましくない。(文脈情報)  
c. 飲み過ぎは望ましくない。(結論=伝達情報(ii))
- (13) a. 発話される条件文:  $F1 : P$  (飲み過ぎる)  
EX1 :  $Q$  (明日つらい)  
b. 文脈情報:  $F2 : Q$  (明日つらい)  
EX2 :  $\neg S$  (それはよくないことである)  
c. 結論: (13a)と(13b)の連言は、次のマッチング条件と等価  
 $F3 : P$  (飲み過ぎる)  
EX3 :  $\neg S$  (それはよくないことである)  
ゆえに、飲み過ぎは望ましくない。

これは条件文の推移性に基づいた推論である<sup>7</sup>。

### 5.3 原因推論による伝達情報

一般にある命題からその原因命題を推論することができる。例えば、(14a)の発話から(14b)の結論を推論することができる<sup>8</sup>。

- (14) a. 最近くしゃみが止まらない。  
b. 花粉症だ。

(8)のスペース構成によると、Eは条件文「PならばQ」の原因命題集合であるから、「PならばQ」はEに含まれる命題Rを伝達することができる。

- (15) a. 牛乳を飲むと、気分が悪くなる。(条件文の発話内容)  
b. 牛乳アレルギーだ。(条件文の原因命題R、ただし  $R \in E$ )

このRが喜田(2000)の言う第三の伝達情報の正体である。第3節で見たように、喜田(2000)はRを条件文の要約とみなしているが、Rをむしろ条件文の原因命題と考えるべきであることを示す事実が存在する<sup>9</sup>。一般に、日本語では、(16a)の形式の文はよいが、(16b)の形式の文は容認されない。(17)がその例である。

- (16) a. OK [結果]ということは、[原因]と考えるしかない。  
b. # [原因]ということは、[結果]と考えるしかない。
- (17) a. くしゃみが止まらないということは、花粉症であると考えられない。  
b. #花粉症であるということは、くしゃみが止まらないと考えられない。

このテストを(15)の命題に当てはめると、次の結果が得られる。

- (18) a. 牛乳を飲むと気分が悪くなるということは、牛乳アレルギーである  
と考えるしかない。  
b. #牛乳アレルギーであるということは、牛乳を飲むと気分が悪くなる  
と考えるしかない。

この事実から、(15b)は(15a)の原因命題であることが分かる。喜田 (2000)の言う  
ように(15b)が(15a)の要約であるとする、(15b)と(15a)は内容的に等価であるこ  
とになり、(18)のような非対称性は生じないはずである。

## 6. 矛盾文

### 6.1 矛盾文の解釈スキーマ

一般に矛盾文「X は X でない」は変化文の一種として分析できる (cf. Sakai  
2005a)。矛盾文の解釈スキーマは次の通りである。

(19)

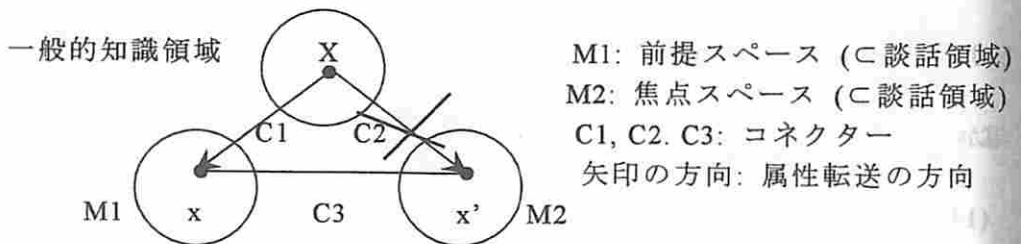


Figure 2: 「X は X でない」

矛盾文は前提スペース M1 に対して、焦点スペース M2 を開く。概略、M1 と M2  
は異なる二つの状況を表すと考えればよい。M1 と M2 はともに談話領域と呼ば  
れる領域に属する。M1 には要素  $x$  がすでに存在し、「 $x$  は X である」という関係  
が成り立っている。ここで、X は一般的知識領域と呼ばれる領域の要素である。  
図中ではこの関係が  $C1(x) = X$  で表されているが、このとき、コネクターを通  
じて X から  $x$  に属性が転送される。矛盾文によって新たに開かれる M2 には、 $x$   
の対応物  $x'$  が導入され ( $C3(x) = x'$ )、かつ、「 $x'$  は X ではない」( $C2(x') \neq X$ )とい  
う関係が導入される。この関係が矛盾文の断定である。すなわち、「X は X でな  
い」は状況 M1 で X としての性質を満たす  $x$  が、状況 M2 では X としての性質を  
満たさなくなることを断定する。「X は X でない」は、談話領域の要素と一般的  
知識領域の要素との間の結合関係の有無を断定するという点では、通常のコピュ  
ラ文と何ら変わりがない。「X は X でない」は必ず二つの状況 M1、M2 が関与す  
る文脈で発話され、かつ M2 を焦点スペースとするため、断定が M2 における  $x$   
の対応物  $x'$  に及ぶに過ぎない。

M1 と M2 はスペース変数であり、発話文脈においての多様な値を取りうる。  
それに応じて、矛盾文は多様な解釈を持つ。例えば、(20)は(21)の解釈を持つ。

- (20) 今日のイチローはイチローではない。  
 (21) a. M1(普段の状況):  $C1(x) = X$ 、ただし  $X = \text{イチロー}$   
 b. M2(今日の状況):  $C2(x') \neq X$

(20)は、普段の状況ではイチロー $X$ の定義属性を満たす個体 $x$ 、すなわちイチローが、今日の時点では $X$ の定義属性を満たさない、すなわちイチローらしくないことを表す。

## 6.2 矛盾文と条件文の解釈スキーマ

ここで、(8)の基底スペース $B$ と(19)の前提スペース $M1$ 、(8)の拡張スペース $EX$ と(19)の焦点スペース $M2$ を対応させることにより、二つのスキーマを単一化することができる。下の図では、 $B$ と $M1$ を単一化したスペースを $BUM1$ で表し、 $EX$ と $M2$ を単一化したスペースを $EXUM2$ で表している。

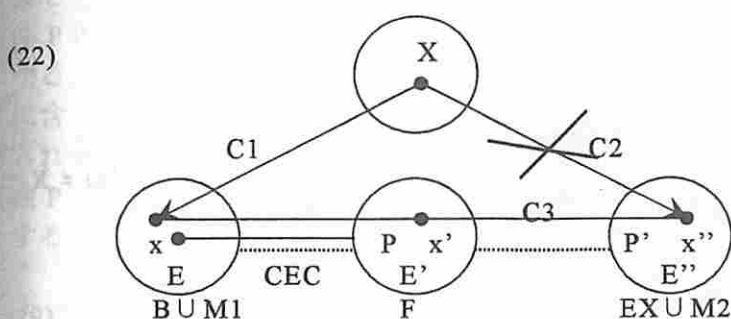


Figure3: 「PならばXはXでない」

こうして得られるのが条件節を伴う矛盾文「PならばXはXでない」の解釈スキーマである。このスキーマは、条件文「PならばQ」の解釈スキーマと矛盾文「XはXでない」の解釈スキーマを単純に合成したものであり、その他の変更は一切行われていない。したがって、(22)のスキーマは、(8)のスキーマと(19)のスキーマの両方によって包摂される。これは、条件節を伴う矛盾文「PならばXはXでない」が条件文「PならばQ」の一種であり、かつ矛盾文「XはXでない」の一種であるということである<sup>10</sup>。したがって、条件文や矛盾文に関して成り立つ性質は、すべて「PならばXはXでない」に関しても成り立つことになる。

スキーマ(22)を(23 = 1)に適用すると、(24)のようになる。

- (23) 猫はねずみを取らなければ猫ではない。  
 (24) a. M1 (= B):  $E$  (命題集合)  $\wedge C1(x) = X$ 、ただし  $X = \text{猫}$   
 b. F: P、ただし  $P = \neg \text{ねずみを取る}(x')$   
 c. M2 (= EX):  $C2(x'') \neq X$

これは「猫である個体 $x$ に条件 $P$ (= ねずみを取らない)を付け加えた個体 $x'$ はも

はや猫ではない」という意味を表している。

### 6.3 矛盾文の伝達情報

#### 6.3.1 肯定式による伝達情報

6.2 節で提示したスキーマ(22)を用いると、(2a)の伝達情報は次のように導き出すことができる。(26)では、(22)の図中にないコネクターを単に C で表している。

(25) a. 猫はねずみを取らなければ猫ではない。(矛盾文の発話内容)

b. 猫でないならば、捨ててしまおう。(文脈情報 1)

c. タマはねずみを取らない。(文脈情報 2)

d. タマを捨ててしまおう。(結論=(2a))

(26) a. 発話される条件文: F1: C(x'), ただし X = 猫  
 $\neg$ ねずみを取る(x')

EX1: C2(x'') ≠ X, ただし C3(x') = x''

b. 文脈情報 1: F2: C(y) ≠ X

EX2: 捨てられる(y'), ただし C(y) = y'

c. 文脈情報 2: T: C(a) = X, ただし a = タマ

$\neg$ ねずみを取る(a)

d. 結論: (26a)と(26c)から、F1 と T のマッチングにより、T: C(a) ≠ X

T: C(a) ≠ X と(26b)から、F2 と T のマッチングにより、

T: 捨てられる(a)

ゆえに、タマは捨てられる。

これは、(10-11)に示した肯定式による推論の一つに過ぎない。(25b)と(25c)が文脈情報として与えられているならば、条件文(25a)は(25d)を伝達するのである<sup>11</sup>。

#### 6.3.2 望ましさの概念による伝達情報

(27a)は(27b)を含意し、さらに、5.2 節で論じたことを踏まえると、(27b)と(27c)の連言は(27d)と等価になる。

(27) a. 猫はねずみを取らなければ猫ではない。(矛盾文の発話内容)

b. タマは、ねずみを取らないならば、猫ではない。((21a)からの帰結)

c. (猫として飼い始めた以上)タマが猫でないのは望ましくない。

(文脈情報)

d. タマがねずみを取らないのは望ましくない。(結論=(2b))

(28) a. 発話される条件文: F1: X(x'), X = 猫

$\neg$ ねずみを取る(x')

EX1:  $\neg$ X(x''), ただし C(x') = x''

b. (27a)からの帰結: F2: X(a), ただし a = タマ

$\neg$ ねずみを取る(a)

EX2: C(a') ≠ X, ただし C(a) = a'

c. 文脈情報: F3: C(a) ≠ X

EX3:  $\neg S$  (それはよくないことである)

d. 結論: (28b)と(28c)の連言は、次のマッチング条件と等価

F4:  $C(a) = X$

$\neg$ ねずみを取る (a)

EX4:  $\neg S$  (それはよくないことである)

ゆえに、猫であるタマがねずみを取らないのは望ましくない。

= タマはねずみを取るべきだ。

これは推移性に基づく推論である。文脈情報(27c)が(暗黙のうちに)与えられているならば、条件文(27a)は(27d)を伝達するのである。

### 6.3.3 原因推論による伝達情報

「PならばXはXでない」の解釈スキーマ(22)は、カテゴリーXに属する個体xに条件Pを付け加えると、その帰結としてxがXに属さなくなる、という事態を表している。(22)において、スペースBUM1とスペースFの唯一の違いは、条件Pの有無である。したがって、条件PのみがXと非Xを区別していることになる。ここから、「PならばXはXでない」の原因命題Eに「 $\neg P$ がXの定義属性に含まれる」(= 一般にXは $\neg P$ である)という命題が含まれているという結論が得られる。この命題が成立するからこそ、属性 $\neg P$ を満たさない個体、つまり、属性Pを持つ個体はXに属さないのである。「X = 猫」、「P = ねずみを取らない」とすると、次のようになる。

(29) a. 猫はねずみを取らなければ猫ではない。(矛盾文の発話内容)

b. 属性「ねずみを取る」が猫の定義属性に含まれる。

= 一般に猫はねずみを取るものだ。((29a)の原因命題=(2c))

したがって、「PならばXはXでない」から「一般にXは $\neg P$ だ」を導く推論は、5.3節で論じた、結果から原因を導く推論の一つである。

## 7. 結論

矛盾文と条件節相当の表現がしばしば共起する(大久保 2000)のは、両者の解釈スキーマが同型であり、両者をそのまま合成することができるためである。「PならばXはXでない」の伝達情報は、矛盾文と条件文の意味論とを組み合わせることにより導出され、他の恣意的な仮定は一切必要ない。したがって、これを矛盾文「XはXでない」の固有の意味とするのは誤りである。

### 注

<sup>1</sup> ここで言う「条件節相当の表現」とは、統語論レベルの性質ではなく、意味論レベルの性質に基づいている。(1)の条件節は(i)のように関係節として現れることもあるが、解釈に変化はない。

(i) ねずみを取らない猫は猫ではない。

ここでは、異なる統語的性質を持つ二つの表現が、意味論レベルでは同一の機能を果たしている。この論文では、(i)の関係節が条件節相当の表現として解釈される過程は考察せず、(1)のよ

うなタイプの文についてのみ分析を行う。(i)に見られる関係節を意味論的に分析するためには、条件文と総称文の関係を明らかにする必要がある。

<sup>2</sup>  $\neg P$  は  $P$  の否定を表す。

<sup>3</sup> IC: 同一性コネクター。煩雑になるので、図中で同一性コネクターに関する情報は省略してある。

<sup>4</sup> したがって、 $E \cup \{P\}$  は  $Q$  の十分条件をなす集合である。

<sup>5</sup> 肯定式とは次のような推論を指す。前提 1:  $\phi \rightarrow \psi$ 、前提 2:  $\phi$ 、結論:  $\psi$

<sup>6</sup> 本節での議論から明らかなように、喜田 (2000) の言う条件文の第一の伝達情報は文脈情報に依存して発生するものである。これを条件文固有の言語的意味と考えるのは明らかに誤りである。これは 5.2 節で論じる第二の伝達情報についても当てはまる。

<sup>7</sup> 推移性法則とは次のような法則である。一般に、 $\phi \rightarrow \psi$  かつ  $\psi \rightarrow \chi$  ならば、 $\phi \rightarrow \chi$  が成り立つ。

<sup>8</sup> ただし、一般に命題  $\phi$  の原因命題  $\psi$  は  $\phi$  の必要条件であるとは限らないので、この推論は誤っている可能性がある。例えば、花粉症でなくてもくしゃみが止まらないことはありうる。

<sup>9</sup> Sakai (2006) がフランス語について同様の議論を行っている。

<sup>10</sup> スキーマ(22)は、スキーマ(19)におけるスペース変数である  $M1$  と  $M2$  が、 $M1 = B$ 、 $M2 = EX$  という値を取ったものと解釈することもできる。

<sup>11</sup> 関連性理論の用語で言えば、条件文の発話(25a)が、文脈(25b-c)において、想定(25d)を文脈的に含意するということである。

## 参考文献

- Dinsmore, John (1991) *Partitioned representations*, Dordrecht: Kluwer.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language*, MIT Press. 坂原茂、水光雅則、田窪行則、三藤博 訳『メンタル・スペース』白水社、1996年。
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in thought and language*, Cambridge: Cambridge University Press, 坂原茂、田窪行則、三藤博 訳『思考と言語におけるマッピング』岩波書店、2000年。
- Fauconnier, Gilles & Mark Turner (2002) *The way we think: Conceptual blending and the Mind's hidden complexities*, Basic Books.
- 喜田 浩平 (2000) 「si と même の意味論的結合関係」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 第 34 号: 27-38.
- 大久保 朝憲 (2000) 「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文学論集』(関西大学) 第 49 卷 4 号: 23-40.
- 坂原 茂 (1985) 『日常言語の推論』、東京大学出版会。
- Sakai, Tomohiro. (2005a): Sur le caractère non tautologique des énoncés tautologiques du type *X est toujours X en japonais*, 『言語情報科学』第 3 号、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻: 87-97.
- 酒井 智宏 (2005b) 「矛盾文と条件文の解釈スキーマ」、日本フランス語フランス文学会 2005 年度秋季大会口頭発表、新潟大学。
- Sakai, Tomohiro. (2006) « À propos de la valeur argumentative des conditionnelles : critique de la théorie de l'argumentation dans la langue » 『明星大学日本文化学部言語文化学科学研究紀要』第 14 号: 127-139.

## Matching and Information Conveyed by Contradictory

### Utterances of the Type *X is not X*

Tomohiro SAKAI

(JSPS Research Fellow, Keio University)

The purpose of this paper is to show that, contrary to the claims made by previous works, the semantics of contradictory utterances of the type *X is not X if P* can be calculated compositionally from the schemata of *X is not X* and conditionals.

*X is not X if P* conveys at least three types of meanings: (i) members of X that have property *P* should not be treated as such, (ii) members of X that have property *P* should try to have the opposite property  $\neg P$ , and (iii) X in general has the property  $\neg P$ . For example, (1) can convey the meanings shown in (2), where *Tama* refers to a particular cat.

- (1) A cat is not a cat if it does not catch mice.
- (2)
  - a. Cats that do not catch mice should not be treated as cats.
  - b. Tama should try to catch mice.
  - c. In general, cats catch mice.

As Fauconnier (1997) argues, conditionals *If P, Q* set up a Foundation Space *F* and an Expansion Space *EX*. Space *F*, defined by *P*, is subordinate to the Base Space *B* while Space *EX*, defined by *P* and *Q*, is subordinate to Space *F*. If any Target Space *T* matches *F*, then the information contained in *EX* is projected onto *T*. The logical link between *F* and *EX* is supported by a proposition set *E*, defined such that  $\{P\} \cup E$  functions as a sufficient condition for *Q* in the rigorous sense of the term (Sakahara 1985).

Contradictory utterances *X is not X* presuppose that in Space *M1* an individual *x* is an X and asserts that in Space *M2* the counterpart of *x* is not an X. By integrating *M1* and *M2* with *B* and *EX* respectively, the schemata of conditionals and contradictory utterances can be unified into the schema of *X is not X if P*. Since *X is not X if P* is now a type of conditionals and of contradictory utterances at the same time, it inherits the properties of both. This accounts for the three meanings mentioned above without any stipulation. (2a) can be obtained with two matching operations, based on the meaning of *X is not X if P* and some contextual assumptions. (2b) is equivalent to the conjunction of *X is not X if P* and the assumption that Tama is expected to remain a cat. (2c) is a proposition contained in the proposition set *E* as defined above, which, together with *P*, constitutes a sufficient condition for *X is not X*, i.e. (2c) is a cause of the proposition expressed by (1).